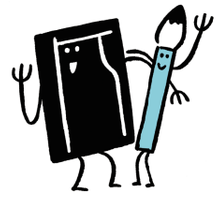
連載 2

書写教育を活性化するために

小学校と中学校を「つなぐ」

高知市立城東中学校　校長　大谷俊彦（おおたに としひこ）



コロナ禍における書写授業の考え方

新型コロナの感染拡大の収束が見えてこない。「主体的・対話的で深い学び」をキーワードにした新学習指導要領が全面実施されようとしているが、各学校現場では、感染防止の観点から、「対話的な学び」をどの程度まで実施できるのか手探り状態が続いている。

では、「対話的な学び」として、いったい何ができるのか。友達と対話しなくても教材と対話することも可能だろう。教材文字と対峙することで見えてくるものがあるのではないか。また、自分自身との対話も可能だろう。「試し書き」と「まとめ書き」から自分の学びを俯瞰的に捉え、自分の成長を感じ取ることも「対話」の一つと言えるのではないだろうか。

また、今後も感染拡大に伴い、再び長期の休業を強いられ、当初計画していた授業時数を大きく下回るような事態も予想される。このような場合、①どの単元を扱って、どの単元を扱わないか考える、②単元の軽重を考え、標準的な配当時数をもう一度見直す、③ＩＣＴ機器を効果的に活用し、指導時間の短縮を図る、などの視点をもって、「書写学習としてはずせない部分はどこなのか」を真剣に問い直さなければならない。まさに教員の「カリキュラム・マネジメント力」が試されているのである。

カリキュラム・マネジメントでは「つなぐ」意識が大切

「カリキュラム・マネジメント」の視点で書写教育全体を考えるうえで大切にしたいことは、「つなぐ」という意識をもつことである。

教材（単元）と教材（単元）を「つなぐ」、学年と学年を「つなぐ」、小学校と中学校を「つなぐ」、書写と他の教科や生活を「つなぐ」、といったことを意識することが大切で、そのようにして書写の教科書は作られている。

1960年，高知県生まれ。県学校教育課指導主事，文部科学省主幹など経て現職。光村図書小・中学校『書写』編集委員。著書に『「学校経営マンダラート」で創る新しいカリキュラム・マネジメント』（ぎょうせい）など。

小学校と中学校を「つなぐ」

小学校と中学校を「つなぐ」教材として、中学校一年生（令和三年度版）では、「漢字の筆使い」で「天地」という教材を使って漢字の基本点画の確認と筆使いを学習することになっている。

令和３年度版『中学書写』P40-41

「天地」は、「点」と「反り」以外の漢字の基本点画が含まれる教材である。中学校は複数の小学校から生徒が入学してくるということもあり、各小学校での書写学習の定着状況を把握するうえでも、欠くことのできない教材である。

中学校の書写学習の最初に「毛筆」を使って、基本点画等の書写用語を学習することの意義は大きい。中学校入学後に書写（毛筆）の学習用具を学校に持参し、道具の確認をしたあと、中学校でも毛筆を使った書写の授業を継続して行っていくことを生徒に意識させたい。

本単元では、漢字の筆使いを学ぶことが主な目的なのだが、小学校の学習内容を「つなぐ」ことを考えると、筆使い（筆圧等）以外に、「天地」で何を学ばせたらよいのだろうか。

「天」では、横画の長さの違いに気づかせたい。令和二年度版小学校書写教科書では、二年生で「画の長さ」を学習することになっていて、「たいせつ」（P18）には、

「よこ画」がいくつかならぶときは、一つだけ長く書くと、字の形がととのう。

と書かれている。

また、「地」は、偏と旁（つくり）との左右の組み立てで構成されており、四年生の「部分の組み立て方（左右）」の「たいせつ」（P８）には、次のように示されている。

☆左右の部分を書くときは、それぞれはばをせまくして、場所をゆずり合う。

☆左の部分を書くときのポイント

①右はしをそろえる。

②「横画」は、右上がりに書く。

③「たて画」は、右よりに書く。

最初の☆の「場所をゆずり合う」という部分は、「地」の四画目の横画の始筆の部分が「つちへん」の中に入り込んで教材文字が示されており、偏と旁が一部重なっていることがわかる。また、二つ目の☆の「左の部分を書くときのポイント」は、「地」の偏に正しく示されている。「天地」を扱うに当たっては、こうした小学校の既習事項にも触れて確認したいものである。

カリキュラム・マネジメントの意識をもち、小学校と中学校の学習を「つなぐ」ことは、このように大きな意義があり、まさに現在の状況下で求められていることではないだろうか。

イラスト　長場 雄